

だいあくぐ

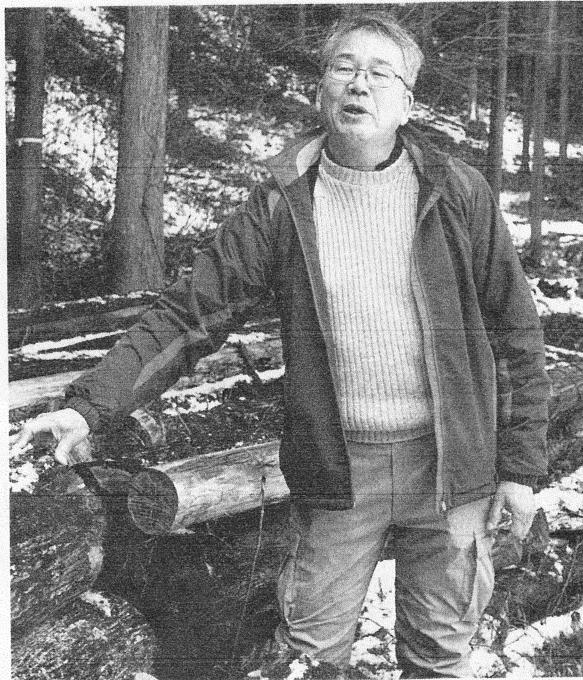
東京彩人記

檜原村で森づくりに携わり30年。NPO法人「フジの森」で事務局を担当する小澤一雄さん(64)は「薪割りとピザ窯の人生」と笑い飛ばす。昨年からは村内の広葉樹の里山再生にも手を広げた。事業が終わるのは自分の次の世代だと思っているという小澤さんに、檜原村にひかれる理由や夢を聞いた。

——なぜ檜原だったのか 理運営に関わり始めましたか?

温泉でも有名な数馬地区で1984年にコンサルタントとして都民の森のコンペに参加したのがきっかけ。廻炉裏のある古い民家を借り、家族や仲間と毎月泊まりがけで遊びに来るようになります。村の人も一緒にでした。檜原で生まれ育つても同世代には廻炉裏は珍しかったようです。——89年にオープンしたコテージ「フジの森」の管

富士写真フィルム(当時)が設立した基金で建てられた。コンサートや野外活動の拠点になっています。村民グループの運営だったのを05年にNPO法人化しました。法人化をきっかけに完全に檜原へ移住し、今は単身赴任中です。



おざわ・かずお 1949年、北海道旭川市生まれ。宇都宮大、東京大大学院で林業や造園を専攻。会社勤務を経て仲間の建築士らと景観を重視する設計事務所を設立。巨木の保存や都市緑化などのパンフレット作製にも携わった。現在は非常勤。

「教育の森」用に買収し、飲食業参入も予定通りですか? 当初から指定管理者として枝打ちや間伐の林業体験、自然観察や草木染め、薪を使う料理などを実施しています。森の中に道を作りました。手を挙げるよう勧

りですか? 3年前から観光地の払沢自然観察や草木染め、薪を季の里」の運営も委託されます。森の中に道を作りました。手を挙げるよう勧

められたからですが、全く知らない人にからかわれました。が、充実感を味わえるようです。販売は収益を意識していることをあります。「参加料を取って働かせている」と知人にからかわれました。——口グハウスキットの販売は収益を意識していることを簡単に行っています。

あります。自然関係のさまざまな公募資金を得られるように努力し、都や村の予算を使ってきましたが、森上。30年以上も人手が入り、放置されてきた広葉樹づくりの費用に森の産物を販売収益を充てる仕組みを作ることも必要だと思いません。もちろん公有林の産物を簡単に売り出せないとい

う制約はあります。——昨年から始めた里山再生は35haの村有林「ふるさとの森」が対象です。広さは教育の森の10倍以上。30年以上も人手が入り、放置されてきた広葉樹林が中心です。市民の力を借りて取り組むつもりですが、自分が生きている間に終わるとは思っていないせん。次の世代に引き継ぎながら進めていきます。

記者の一言

コテージから連なる森の入り口には雪が積もり、小動物の足跡が残っていた。ウサギの足跡だという。NPOの森林整備、費用の工面などについて話を聞くたびに思っていたことがありました。なぜ古里でもない檜原村にのめり込み、人生の半分を費やすほどになつたのかと。小澤さんの熱意があればこそだが、人材を求める周囲とのタイミングが合っていたのだなど感じた。

聞き手/社会部・横井信洋記者